



「キネマの神様」 松竹映画 100 周年記念作品
山田洋次監督作品
沢田研二 菅田将暉 永野芽郁 宮本信子
脚本／山田洋次 朝原雄三
原作／原田マハ「キネマの神様」(文春文庫刊)

あなたがいたから 私でいられた
人と人が つながれない
そんな今だから あなたのことを思います

緊急事態宣言下で、芸術・文化的な施設であるコンサート、演劇の開催自粛、美術館、博物館、イベント会場、映画館などが閉演や休館、入場制限などを余儀なくされています。2021年4月26日から公開予定だった山田洋次監督の「シネマの神様」が、3度目の上映延期になりました。

この映画は、原田マハさんの原作を山田洋次監督が、若き日の円山郷直(まるやま さとなお)・ゴウ役を菅田将暉さん(過去パート)、現在のゴウ役を志村けんさん(現在パート)が務めることになっていました。

ところが、昨年(2020年)3月末にW主演である志村けんさんが新型コロナウイルスによる肺炎の悪化でご逝去されました。

その後、第1回目の緊急事態宣言が発出され、撮影の長期中断をせざる得なくなりました。

しかし、この作品を無事完成させることが、志村さんの一番の供養になると信じ、コロナ禍の終息が見えない中、ゴウのキャスティングを開始しました。

そして、「8時だよ!全員集合」やラジオ番組「ジュリけん」やコントなどで志村さんと多く共演した、沢田研二さんが代役を務めることになりました。志村けんさんにとっては、映画初主演作、沢田研二さんにとっては、映画出演は、14年ぶり、山田監督作品は、1982年『男はつらいよ 花も嵐も寅次郎』以来38年ぶりとなりました。志村さんから沢田さんに魂のバトンが渡り再始動した本作、撮影再開後もコロナ危機と常に隣り合わせで数々の困難がありましたが、それを一つずつ乗り越え、ようやく公開が見えてきました。コロナの影響を大きく受けた映画として、コロナに限らず、様々な苦境に立たされたすべての人と一緒に乗り越えたい、そして、無事に公開を迎えることで、勇気と希望を与えたい。

きっといる”映画の神様“を信じて。心からそう思っています。当初2020年12月公開予定が、2021年4月に延期され、そして、今回の緊急事態宣言によって、8月6日に再々延長されました。

今、一番、映画館で見たい映画です。

映画は、まだ、上映されていませんが、この映画には、原作の小説があります。そして、山田洋次監督が脚本を書き、その脚本をさらに原田マハさんが、ノベライゼーションした小説があります。ちょっと面白い構造です。

小説『キネマの神様』
原田マハ
初出誌 2007年
単行本 2008年
文藝春秋

ノベライズ『キネマの神様』
原田マハ
ディレクターズ・カット 2021年
文藝春秋



山田洋次監督 脚本
映画『キネマの神様』



娘・歩／寺島しのぶ

テラシン／小林稔侍
／野田洋二郎

ゴウ／沢田研二
／菅田将暉

淑子／宮本信子
／永野芽郁

銀幕スター・桂園子
／北川景子

ちょっと、ここで映画作品によく使われる言葉の説明です。

「ノーカット」版というのは、最初に完成した状態から全くカットを加えていない作品ということになります。

「ディレクターズ・カット」版とは、劇場公開をされたあとに施される再編集のことを指します。ハリウッド映画などでは監督よりもプロデューサーの方が偉いため、監督は映画の編集をすることが許されていません。そのため、監督の思い描く映画を作るためにディレクターズ・カット版が生まれたと言えます。監督自ら、未公開部分や新たなカット割などを追加した映像作品や、映画になったものです。

この原作原田マハ「シネマの神様」の中でも重要な映画作品として描かれているものがあります。原作からの引用です。



「胸に染み入るオープニングの音楽が流れだす。イタリア映画らしい。幸福感と哀愁がブレンドされた、ピアノとヴァイオリンの響き。アンドレア・モリコーネの曲「愛のテーマ」。ベランダの白い手すりの上の植木鉢に寄っていたカメラが、ゆっくりと後ろに引いていく。潮風に揺れるカーテン、テーブルの上に山盛りになったレモン。やがてシチリアらしい、海を見渡す窓辺が現れる。その明るさ、その心地よさ。画面に見入るうちに、潮風がそよ吹くシチリアの白いベランダへと、あっというまに連れ去られてしまう。オープニングのクレジットが流れるあいだに、私の旅はもう始まってしまった。 シネマの神様 文春文庫 p48」

「イタリアの離島の小さな映画館を舞台にした、映写技師と少年との友情物語。映画館のシーンでは、観客の様子が映し出される。劇場を埋め尽くした村の人々が、笑ったり、泣いたり、怒ったり、恋をしたり。「映画」という世界を共有する濃厚な時間、観客の間に不思議な連帯感が生まれる。 シネマの神様 p68」

今回、この映画『ニュー・シネマ・パラダイス』を「完全版（ディレクターズ・カット版）173分」と「劇場公開版（インターナショナル版）123分」の2種類を見直してみました。



『ニュー・シネマ・パラダイス』（伊: Nuovo Cinema Paradiso）は、1988年のイタリアのドラマ映画。監督はジュゼッペ・トルナトーレ、出演はフィリップ・ノワレ、ジャック・ペラン、サルヴァトーレ・カシオなど。

中年を迎えた映画監督が、映画に魅せられた少年時代の出来事と青年時代の恋愛を回想する物語。感傷と郷愁、映画への愛情が描かれた作品である。後述の劇場公開版が国外において好評を博し、しばらく停滞期に入っていたイタリア映画の復活を、内外一般に印象付ける作品となった。映画の内容と相まってエンニオ・モリコーネの音楽がよく知られている。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



劇場版

映写技師アルフレードは青年のトト（サルヴァトーレ）に、故郷の町に帰ってきてはいけない、と強く言います。そしてトトは、その言葉を守り続け、ローマで映画監督として成功します。トトは地位も名声もお金も手に入れました。そして、30年後アルフレードのお葬式のために故郷に帰ってきます。



「人にはそれぞれ従うべき星がある」
「人生はお前が見た映画とは違うんだ。人生はもっと厳しいものだ」
「もうお前とは話さない、お前の噂を聞きたい」



トトはアルフレードの遺品のフィルムを観ます。

あの時に流したトトの涙は、自分のことをずっと気にかけて、大切に思ってくれていたアルフレードの愛情を再確認し、彼の愛情と、30年たって、街の風景は変わってしまっても故郷の人々の気持ちは大きく変わっていなかったことが嬉しかったからだと思います。トトはあのフィルムを観て、社会的には成功はしたけれども空虚だった日々から、生きている実感と喜びを取り戻したのだと感じます。アルフレードから過去に生きるのではなく、現実（いま）を生きていけ、ということと呼ばかけられ、「何をやるにしても自分のする事を愛せ。子供の頃、映写室を愛したように」という言葉を聞き、この後の人生も前に進むことができると確信したと思います。

完全版

トトは映画監督として成功する代わりに一番大切な愛情を手放してしまいます。





「99 日目の夜」の王女と兵士のおとぎ話

「友達は顔つきで選ぶ、敵は頭の良さで選ぶ」

「視力は失ったが、前より見えるようになった」

「体が重いものほど、足跡は深くなる。恋心が強いほど、傷も深くなる」



もしトトがエレナとあのまま付き合っていたとしても、別れてしまったかもしれません。でも、もしうまくいって結婚していたら、裕福ではなくても幸せな家庭を築いていたかもしれません。なかなか現実には映画のように進まないものです。





良い作品というのは、見るたびに異なる印象を与えてくれるものです。

今回久しぶりに完全版を観ることによって、サルヴァトーレとエレナの物語を感じることが出来ました。これからも何度でも繰り返し観たい映画の一つです。

その他にも原田マハの「キネマの神様」には、「フィールド・オブ・ドリームス」「硫黄島からの手紙」「七人の侍」など、たくさんの映画作品が出てきます。もう一度、じっくりと見直したい作品ばかりです。

最後に「キネマの神様」の冒頭文を引用して終わります。

「暗闇の中にエンドロールが流れている。ごく静かな、吐息のようなピアノの調べ。真っ黒な画面に、遠くで瞬く星さながらに白い文字が現れては消えていく。観るたびに思う。映画は旅なのだ。幕開けとともに一瞬にして観るものを別の世界へ連れ出してしまふ。名画とはそういうものではないか。そして、エンドロールは旅の終着駅。訪れた先々を、出逢った人々を懐かしむ追想の場所だ。だから長くたっていい。それだけじっくりと、思い出に浸れるのだから。最後の一文が消え去ったとき、旅の余韻を損なわないように、劇場内の明かりはできるだけやわらかく、さりげなく点るのがいい。 キネマの神様 p7」

追記

映画館の「テアトル銀幕」は、「飯田橋ギンレイホール」を想像させます。ぜひ、緊急事態宣言が解除されたら、小津安二郎監督の「東京物語」など、日本の名作も劇場で観賞したいと思います。

さらなる追記

原田マハ「キネマの神様 ディレクターズ・カット」からの引用。

- 一 おい歩。(ニュー・シネマ・パラダイス)は、絶対にディレクターズ・カットのほうがいいぞ。映画館で上映しているのは、配給会社の都合で監督の観せたいところをカットしちゃってるんだからな。
- 一 映画はな、歩。ほんとは誰が主演かで観るもんじゃない。監督で観るもんだ。なぜって、映画っていうのは監督のものだから。だから、ディレクターズ・カットがなんといってもいちばんなんだよ。
- 一 歩。お前もしんどいことがいっぱいあるだろうけど、それが人生ってもんだからな。人生は映画じゃない。都合よくカットはかからないんだ。でも、だからこそ、人生に映画があるんじゃないか。なあ、そうだろう？ ままならない人生をどうにかこうにか生き延びるために、人は映画を観に行くんだ。映画の中に、自分がそういきるはずだったかもしれないもうひとつの人生を探しに。だから、この世に映画がある限り、人々は映画館へ出かけていこう。家族と、友人と、恋人と…ひとり涙したいときには、ひとりぼっちで。

本編には、寅さんのアリアのようにいたるところにゴウのアリアが散りばめられています。

特に歩が授賞式でゴウの代わりに読む手紙を是非、劇場で聴きたいと願っています。

映画館が再びドアを開ける日が来ることを「シネマの神様」に祈りたいと思います。